

「21世紀COEプログラム」（平成15年度採択）中間評価結果

機関名	聖路加看護大学	拠点番号	F31
申請分野	医学系		
拠点プログラム名称 (英訳名)	市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点 Nursing for People Centered Initiatives in Health Care and Health Promotion		
研究分野及びキーワード	〈研究分野:看護〉(がん看護)(母性・女性看護学)(小児看護学)(老年看護学)(在宅看護)		
専攻等名	大学院看護学研究科看護学専攻・看護実践開発研究センター		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)	小松 浩子 教授	他 14名

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成17年4月現在）を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について> これまで医療の発展を支えてきた科学が、知を創出し、それを人々に与えるという科学の社会還元をめざすものとするならば、それとは別の、市民の〈生きてきた経験〉を尊重し、人々とのパートナーシップのもとに社会における安寧や健やかさを創り出すという新しい看護実践科学を創生する。</p>
<p><本拠点の目的> これまでの看護実践開発研究を深化、融合し、人々の生きてきた経験や知恵を互いに活用することを通して、変革する社会や医療の狭間に積み残されがちな健康問題の打開をはかる市民主導型の健康生成を促進する看護学(People-centered Care)を創出する。具体的達成目標は次の通りである。①自らの健康促進のために、市民がヘルスケアに関連した決定および選択に主体的に参与し、健康資源を有効に利用するためのパワーとコントロールを手にするを推進するPeople-centered Careモデルを開発し、コミュニティに適用し、妥当性・実用性を検証する。②モデルの開発過程で得たエビデンスを健康情報コンテンツとしてデジタル化し、websiteやe-learningにより国内外の人々と相互交信する。③市民や専門職者の視点から、モデル開発により生み出された看護サービスの質を評価し、政策提言や拠点のさらなる拡充と洗練を図る。①～④の活動を通して、People-centered Careの理論構築を行う。</p>
<p><計画：当初目的に対する進捗状況等> Community-based participatory researchを基軸に、〈病との共生と看護〉〈先進医療と看護〉〈社会構造のひずみと看護〉〈市民主導型看護サービス方略開発〉の4領域11研究プロジェクトにおいて、People-centered Careモデルの開発を推進した。納得の上で自分の医療を意思決定するためのセルフガイドなどが開発された。併せて、研究成果から良質（科学的根拠に基づく）で実用性に富む健康情報コンテンツを構築した。これらは、市民が手軽にアクセスでき、役立つ健康情報として利用し、必要時相互交信できるメタ・データベース・システム「看護ネットhttp://www.kango-net.jp/」としてWeb上にオープンさせた。新たな医療コミュニティ形成のためのプロモーション活動（国際駅伝シンポジウムなど）を行った。これらの全活動は、フィールド・データとして蓄積・統合し、People-centered Careを構成する共通要素やその実現化にむけた新たな協働・連携のあり方や方法論を見出し集積している。</p>
<p><本拠点の特色> 医療における科学技術の進展とその恩恵を、人々の豊かさや、安心、健やかさの実感につなげられるよう、医療者サイドの視点ではなく、医療の主役である市民の視点からナビゲートする新しい看護実践科学の創生をめざしている。そのため、研究計画・実施・評価の全過程において市民が参与し、パートナーシップ（対等な立場に基づく協働）によって推進するcommunity-based participatory researchに依拠し全研究プロジェクトを推進した。このことにより、市民の暮らしに関連する異分野の学問領域との融合が期待でき、これまでの看護実践科学を深化させるようなPeople-centered Careが創生される。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性> 国民の生活の安定と安心を保障するはずの医療費が国内総生産(GNP)を逼迫する勢いで伸びをみせる今日、効率的・効果的な医療資源の活用方法を、社会に暮らす全ての人々が生きてきた知恵を結集して早急に見出す必要に迫られている。People-centered Careの創生は、この国民的課題解決の具現化の一翼を担うものである。健康・医療について分かり合える言葉で対話し自分に必要な医療を選択していけるノウハウや仕組みを市民との協働により生み出す取り組みからは、「新ヘルス・コミュニケーション論」「医療コミュニティ論」の創出が期待でき、医療危機を脱し21世紀の健康・生活の向上に寄与できる。</p>
<p><本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果> People-centered Careモデルの開発とその実用化を経、生きてきた経験や知恵に基づいて必要な医療を納得して選択し、自分の潜在力を医療資源として役立てる主体的な医療への参画を可能にする「医療コミュニティ」の形成が期待できる。場や時間を越えて必要時、中立的な立場から発信される良質で役立つ健康情報の相互交信を可能にするメタ・データベース・システム「看護ネット」が完成する。これらの事業活動の集積から、「新ヘルス・コミュニケーション論」「意思決定論」「医療協働論」などの新しい学問領域を融合したPeople-centered Careの理論構築がすすむ。そして、この新しい看護実践科学の創生と発展を担う人材の育成がなされる。</p>
<p><本拠点における学術的・社会的意義等> 〈自分にあった医療の意志決定〉〈家で死ねるまちづくり〉などのcommunity-based participatory research活動からは、民衆の知を結集できる新たな「医療コミュニティの具現化」が期待できる。このような、市民にも見えやすく、分かりやすく、ともに活動を起こすことが容易と感じられる看護実践科学の創生は、社会学、組織論などの異分野の研究領域と密接に関連しながら進められるものであり、こうした学術的融合は、医療システム改革に向けたパラダイムシフトの原動力となり得る。このことは、閉塞感を感じる社会の安心と健やかさに根ざす市民社会形成につながり社会的意義もきわめて大きい。</p>

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>
<p>(コメント) 本計画は、人々が自分に合う医療について意思決定すること等を促進しようとする、今日必要性の高い分野である。「セルフガイド」の開発、健康情報コンテンツの構築、「看護ネット」の開設などの実践は評価できる。今後研究を発展させ、国際的な交流、国際誌への発表を促進していただきたい。 また、人材育成をどのような総合的計画の下に進めていくのかを、この時点であらためて問い直して今後実施されたい。 有機的連携については、進行中の研究プロジェクト間でこの課題の進め方に関して検討し、また広く意見を求めるべきと考える。 「市民主導（型）」の意味が明確でない。その主体とあり方、専門家がどのようにかわるか、「市民の知恵」がどこに活かされているのかが見えにくい。「市民主導（型）」とは何かを明確にして研究を方向づけるとともに、客観的、定量的視点を強化することが必要である。 また、人々によく知られていることだけでなく、看護の立場から見て大切なテーマを設定し、その取り扱いについて検討されたい。</p>